武蔵野日曜聖書講筵

パウロとペテロ
――使徒行伝第９章23～43節――

１９９１年６月16日
小池辰雄

ダマスコのサウロ　サウロはエルサレムへ　アイネヤよ、起きて床を収めよ　タビタ、起きよ
自分がキリストと一つ　福音を日本的に消化　もうひとつ奥の世界　新約は愛の聖霊の世界

【使徒９】

23日を経ること久しくして後、ユダヤ人かれを殺さんと相謀りたれど、24その計畧サウロに知らる。かくて彼らはサウロを殺さんとて昼も夜も町の門を守りしに、25その弟子ら夜中かれを籃にて石垣より縋り下ろせり。

26ここにサウロ、エルサレムに到りて弟子たちの中に列らんとすれど、皆かれが弟子たるを信ぜずして懼れたり。27然るにバルナバ彼を迎えて使徒たちの許に伴いゆき、その途にて主を見しこと、主の之に物言い給いしこと、又ダマスコにてイエスの名のために臆せず語りし事などを具に告ぐ。28ここにサウロはエルサレムにて弟子たちと共に出入りし、29主の御名のために臆せず語り、又ギリシヤ語のユダヤ人と、かつ語り、かつ論じたれば彼等これを殺さんと謀りしに、30兄弟たち知りて彼をカイザリヤに伴い下り、タルソに往かしめたり。

31かくてユダヤ、ガリラヤ及びサマリヤを通じて、教会は平安を得、ややに堅立し、主を畏れて歩み、聖霊の祐助によりて人数いや増せり。

32ペテロは徧く四方をめぐりてルダに住む聖徒の許にいたり、33彼処にてアイネヤという人の中風を患いて八年のあいだ床に臥し居るに遇う。34かくてペテロ之に『アイネヤよ、イエス・キリスト汝を医したもう、起きて床を収めよ』と言いたれば、直ちに起きたり。35ここにルダ及びサロンに住む者みな之を見て主に帰依せり。

36ヨッパにタビタと云う女の弟子あり、その名を訳すればドルカスなり。此の女は、ひたすら善き業と施済とをなせり。37彼そのころ病みて死にたれば、之を洗いて高楼に置く。38ルダはヨッパに近ければ、弟子たちペテロの彼処に居るを聞きて、二人の者を遣し『ためらわで我らに来れ』と請わしむ。39ペテロ起ちてともに往き、遂に到れば、彼を高楼に伴れてのぼりしに、寡婦

らみな之をかこみて泣きつつ、ドルカスが偕に居りしほどに製りし下衣・上衣を見せたり。40ペテロ彼等をみな外に出し、跪づきて祈りし後、ふりかえり屍体に向かいて『タビタ、起きよ』と言いたれば、かれ目を開き、ペテロを見て起き反れり。41ペテロ手をあたえ、起こして聖徒と寡婦とを呼び、タビタを活きたるままにて見す。42この事ヨッパ中に知られたれば、多くの人、主を信じたり。43ペテロ皮工シモンの家にありて日久しくヨッパに留まれり。

●ダマスコのサウロ

今日は使徒行伝９章の後半です。

23日を経ること久しくして後、ユダヤ人かれを殺さんと相謀りたれど、

パウロはダマスコに入って行って、添文をもらった人たちを捕まえるどころじゃない、逆に、彼らの、キリスト者の味方になって、そして、滞在して伝道を始めていたわけです。

「17我より前に使徒となりし人々に逢わんとてエルサレムにも上らず、アラビヤに出で往きて遂にまたダマスコに返れり。18その後三年を歴てケパを尋ねんとエルサレムに上り、……」（ガラテヤ１・17～18）

ですから、エルサレムに返るまでには、三年以上、どこかアラビヤの方へ出掛けて祈ったらしい。それがガラテヤ書に書いてある。使徒行伝の方は、むしろそこがあまりはっきり書いてないですが。

それで、ユダヤ人はパウロを、

「自分たちの信仰から背いた反逆者だ」

というわけで、

「殺さんとした」

と書いてある。なかなか、パウロは、今までの自分のやり口を、過去を見て、それでもって律せられるものだから、変わったことが分からない。それは分からんですよね、本当の急変をしたから。そういうことがここに書いてある。三年以上ですから、随分長いこと居たわけだ。

24その計畧サウロに知らる。かくて彼らはサウロを殺さんとて昼も夜も町の門を守りしに、25その弟子ら夜中かれを籃にて石垣より縋り下ろせり。

パウロにその事が分かった。彼らは、パウロが外に出ないように、門で待ち伏せしていたから、門を通るわけにいかない。そこで、パウロにお弟子さんができていましたから、夜中、彼をカゴにいれて石垣からつり下ろした。

旧約の、エリコの町を攻撃した時に、遊女のラハブというのが、斥候をつり下ろして逃がしたというのがあるでしょ。あれと似たようなものです。本当に危なかったですね。夜陰に乗じて石垣からつり下ろした。城壁があるから、門を通らなければ、本当は出られない。

このことは、コリント後書の11章にも書いてある。たくさんの艱難に遭った。

「32**ダマスコにてアレク王の下にある総督われを捕らえんとてダマスコ人の町を守りたれば、33我は籠にて窓より石垣伝いに縋り下ろされてその手を脱れたり。**」（コリント後11・32～33）

総督からして、そうだったんだね。その事実を、パウロはコリント後書でもって、こう書いた。いろんな危機を、危ない所を、あちらこちらで経験したと思うんですが。

●サウロはエルサレムへ

そして、エルサレムに出掛けて行ったというのは、ずっと後の話なんだけれども。

26**ここにサウロ、エルサレムに到りて弟子たちの中に列らんとすれど、皆かれが弟子たるを信ぜずして懼れたり。**

相変わらず、エルサレムでは、「あの野郎！」というわけで、まだ信じないわけです。ところが、クプロ島のバルナバという――パウロとある程度一緒にやった人ですね、伝道にも出掛けて行った――のが、

27**然るにバルナバ彼を迎えて使徒たちの許に伴いゆき、その途にて主を見しこと、主の之に物言い給いしこと、又ダマスコにてイエスの名のために臆せず語りし事などを具に告ぐ。**

パウロのことをバルナバが詳しく説明してやるわけです。それでやっと、「そうか」というわけでね。

28**ここにサウロはエルサレムにて弟子たちと共に出入りし、**

そこの所にいたのは、ペテロとヤコブでしょう。ヨハネはそこにはいなかった。

29**主の御名のために臆せず語り、又ギリシヤ語のユダヤ人と、かつ語り、かつ論じたれば**

ギリシヤ語をしゃべれるところのユダヤ人ですね。これはエルサレムから出ていったご連中だ。エルサレムに留まっているのはギリシヤ語を知らないわけだ。

彼等これを殺さんと謀りしに、

このギリシヤ語を語るユダヤ人というのも改宗はしていないわけですね。ですから、ユダヤ教徒なんだ。やっぱり彼を殺さんとした。

30**兄弟たち知りて彼をカイザリヤに伴い下り、タルソに往かしめたり。**

これは本当の兄弟ですね。「兄弟」というのは、キリスト教に変わった人たち。あの辺は、ピリポやペテロが伝道して、それで改宗した連中でしょ。キリキヤのタルソはパウロの故郷です。そんなことで、なかなか大変だった。

それから、今度はいよいよ後で、大伝道に取りかかるんですが、その変わりどきには、何年もこうやって信じられない場合があったわけだな。

●アイネヤよ、起きて床を収めよ

それから、９章の31節からは、パウロでなくて、今度は、ペテロのことが書いてある。ペテロのことは、大分これから出てきます。パウロの伝道は13章からだ。それまではペテロだ。ですから、使徒行伝の約半分はペテロですね、やっぱり。

31**かくてユダヤ、ガリラヤ及びサマリヤを通じて、教会は平安を得、ややに堅立し、主を畏れて歩み、聖霊の祐助によりて人数いや増せり。**

もう、もちろんペンテコステの後ですから、ペンテコステで改宗した連中が大分いるわけです。

32**ペテロは徧く四方をめぐりてルダに住む聖徒の許にいたり、33彼処にてアイネヤという人の中風を患いて八年のあいだ床に臥し居るに遇う。34かくてペテロ之に『アイネヤよ、イエス・キリスト汝を医したもう、起きて床を収めよ』と言いたれば、直ちに起きたり。**

大変な事だ。ペテロは完全にキリストの霊が乗り移っている霊止ですから、

「アイネヤよ、イエス・キリスト汝を医したもう」

と――「たまわん」じゃない――

「必ず癒したもうよ」

と。

「起きて床を収めて、歩け」

と言ったら、直ちに起きてしまった。非常に簡単に書いてあるけれども、こういう御霊の現実には参りますね。我々がいかに使徒たちよりかまだ次元的に低いかが分かる。

35**ここにルダ及びサロンに住む者みな之を見て主に帰依せり。**

「いや参った」と、この事実を見て主に帰依した。正に帰依する、南無したわけです。

●タビタ、起きよ

そうすると、今度は、

36**ヨッパにタビタと云う女の弟子あり、その名を訳すればドルカスなり。此の女は、ひたすら善き業と施済とをなせり。37彼そのころ病みて死にたれば、之を洗いて高楼に置く。38ルダはヨッパに近ければ、弟子たちペテロの彼処に居るを聞きて、二人の者を遣し『ためらわで我らに来れ』と請わしむ。39ペテロ起ちてともに往き、遂に到れば、彼を高楼に伴れてのぼりしに、寡婦らみな之をかこみて泣きつつ、ドルカスが偕に居りしほどに製りし下衣・上衣を見せたり。**

「タビタ」というのはヘブライ語ですが、ギリシャ語に訳すと「ドルカス」、カモシカのことです。「タビタ」というのはカモシカのことなんだね。実存のしっかりした女性であった。

ドルカスは下衣・上衣を造っては、人々に与えていた。

「そういう施しをしていた人ですよ」

というわけです。

40**ペテロ彼等をみな外に出し、跪づきて祈りし後、ふりかえり屍体に向かいて『タビタ、起きよ』と言いたれば、**

祈る時に、疑ったり批判したり、そういったような人が居たらダメなんです。だから、本当に一緒に祈る人だけで。キリストもそうでしたね。ごく二、三人で、後は出ていってくれと。この時は、ペテロ一人になっちゃった。みんな出してしまった。そして、これはなかなか簡単でない。

「**跪づきて祈りし後、ふりかえり屍体に向かいて『タビタ、起きよ』**」

と言った。キリストと同じだね、

「**ラザロよ、出できたれ**」

というのと。

かれ眼を開き、ペテロを見て起き反れり。

もう、参ってしまうです、こういうものは。解説も何もできやしない。だから、祈りというのは、決して第三者的な気持で祈ったってダメなんだ。もう本当にキリストと一つになっていなくては。それに、病人でなくて、これは死人だ。

●自分がキリストと一つ

だから、使徒たちの次元は凄いということが分かる。これはもう、普通とは違う。アイネヤとタビタ。８年間の中風の者を治した。キリストなんか、何年たってても、たちどころに治してしまう。

そういうキリストの聖霊の世界というのは、いい加減な気持で「聖霊」なんて言えないんですよ、本当は。もちろん、聖霊の業は、癒すことばっかりじゃないです。いろんな業がありますから。

聖霊の働きのあらゆる方面を本当に一人で持っていたのは、正にひっくり返されたこのパウロです。だから、パウロは、こういう手紙を書いたって、新約聖書の大事な部分をなすような、みんなこれは聖霊の文字ですからね。考えられた文字ではないですから。

だから、パウロについていくら書いたってダメなんだ、について書いたのでは。パウロと即した次元に入って、そこから告白するようなことにならないうちはダメなんだ。「に関して」いくら研究して書いたって、それはダメ。ダメと言ったって、それは悪いとは言わない。間違っているとも言いませんけれども。本当の現実は、その現実に入ってから。だから、我々は、

「御霊の世界は限りなく深められていかなければダメだ」

と、こういうわけです。

41 **ペテロ手をあたえ、起こして聖徒と寡婦とを呼び、タビタを活きたるままにて見す。** 42 **この事ヨッパ中に知られたれば、多くの人、主を信じたり。** 43 **ペテロ皮工（かわなめし）シモンの家にありて日久しくヨッパに留まれり。**

それはもう、こういう現実を見たら、本当に参ってしまった。

とにかく、我々も、キリストの中に本当に自分を入れて、その現実で祈ることです。魂がそこに入らないで、ただ祈ったってダメですよ。まず、自分がキリストと一つとなるその現実に入って、それから祈らないと。

●福音を日本的に消化

ドイツにはドイツの神学があっていい、イギリスにはイギリスの神学があっていい。神学はそれぞれの民族のクリスチャンが、そこで福音をどのように本当に消化したか、それをロゴス的に展開したものが、神学というんです。内村先生は、神学そのものは別に展開なさらないけれども、内村先生の本は正に日本的です。福音を日本的に消化した点ではバタ臭くないわけです。

もちろん、漱石の文学も、漱石はイギリスの文学に非常に詳しい人ですが、漱石の文学を読んで、イギリス的な感じはしない。正に日本的ですね。本当に消化するというと、その歴史、その国土、風土、それがその人を通して、しみ込んで出てきているわけです。各々それが、本ものを受けとれば、その日本らしさ、ドイツらしさ、イギリスらしさに於て、本ものが出てくる。

この花瓶の花はみんな本当の花です。造り花じゃない。それぞれ姿は違うし、香（にお）いは違うし、色も違う。けれども、これはみんな本もの。しかし、根源は太陽の光。聖霊を本当に受けとれば、それが本当に花咲けば、本ものがそれぞれの姿で出てくる。同じことですよ、花でも木でも、我々人間も。日本人の中でまたみんな違うんだ。その人らしさというものが出てきながら、特殊でありながら、普遍的なものがその奥にある。その点で共通である。

●もうひとつ奥の世界

だから、イデオロギーの世界は、イデオロギーのもうひとつ奥の世界を持たないと、そのイデオロギーが本当に活きない。イデオロギーを絶対化したら、必ず喧嘩になる。世界の政治家がしょっちゅうそれでゴタゴタやっているのは、それなんですよね。イデオロギーのもうひとつ奥の世界を持たなければダメです。

そうすれば、そこは本当の意味における「人間」の世界だ。

「メンシュリッヒカイト」（人間性）

本当の「人間性」。大政治家がキリストの光を本当に内側に持てば、本当の人間性が出てくる。

そうすれは、本当の握手ができる。

「イデオロギーはそれぞれで結構だ、しかし、本当の平和の握手ができる」

と。それぞれのイデオロギーを認めながら、そして、本当に協力できるという世界は、もうひとつ次元の違った世界を持たなければできないんですよ。それを持たないでやっているからいつまでたっても、

「ああだ、こうだ」

と議論倒れしてしまうんだ。しまいには、武力に訴えてみたりさ。大事なことなんです、これは。

私はもちろん詩の上でそれを表現しますけれどもね。歌の世界でも、音楽の世界でも、絵の世界でも、文学の世界でも、みんな同じこと。やっぱり、一番奥の世界を持たないとダメなんだよな。仏教のいろんな宗派があるけれども、本ものだと、私はみんなそれが見えるわけだ。

「ああ結構でございます」

と。日蓮みたいに他宗を排撃することはない。人間の相対的現実はお互いに欠陥があるよ。そんな欠陥をお互いに言い合ったって、しょうがないんだ。それだけの、本当の意味の魂の弾力性を持たないとね。

だから、新約聖書を見て、パウロはパウロらしさ、ペテロはペテロらしさ、ヨハネはヨハネらしさ、ヤコブはヤコブらしさ、その「らしさ」において、

「どれも、ああ結構でございます」

と。パウロを読めばパウロが分かる。ヨハネを読めばヨハネが分かる。本当に分かるためには、パウロの奥の世界、ヨハネの奥の世界を持っていれば、分かる。持たなかったら、すぐ、

「パウロはこうだが、ヨハネはこうだ」

と、いわゆる比較をする。いわゆる比較ではダメなんですよ。そして、善し悪しをやる。そういう議論はダメです。パウロの善さ、ペテロの善さ、ヤコブの善さ、ヨハネの善さ、というものを正しく認識できる。もうひとつ奥の世界を持てば。ということは、本当の無色透明の光で当てていけば。無色透明の光の世界がこの聖霊の世界です。聖霊というものを、そういう角度から本当につかまえていないんだな、普通のキリスト教界は。私は無教会にいた時は全然ダメだ、そんなのは分からなかった。

だから、行き詰まらないんです。行き詰まらなくて、限りないんです。楽しいんです。

●新約は愛の聖霊の世界

例えばね、旧約では戦争がたくさんあるだろ。エホバの戦だよ。

「エホバは勝ちたもう」

と。だけれども、旧約はやっぱり旧約の限界がある。キリストは、

「**剣（つるぎ）を持つものは剣で滅びる**」

と言われた。キリストは戦争なんか肯定していない。旧約の世界は、

「**エホバの力で勝った**」

なんてやっているんだから。彼らの信仰の限界なんです。仕方がない。

「**あいつらをやっつけて、皆殺しにしろ**」

なんて書いてあるでしょ。

「**幼き子供にいたるまでみんな殺してしまえ**」

なんて、冗談じゃないよ。そんなことを手放しで肯定できるかというんだ。旧約を読むときには、そこらを気を付けなければいかんですよ。詩篇の中にもそんなことが書いてあるから。

「**乳飲み子まで殺してしまえ**」

なんてことを書いてある。とんでもない。これ、聖書の中に書いてあるんだ。

「**それを生かしておいたら神さまの命令に背いた**」

と、こういうわけだ。ひどいもんだ。よくそんな残酷な事ができたもんだね。

だから、その点で、新約は聖霊の世界です。新約は安心して読める。旧約は、キリストの光でもって、ちゃんと仕分けして読まないとね。ただ、預言者はそういうところからからなり抜けている。特に、イザヤ、エレミヤ、エゼキエル、このあたりはもう、やっぱり三大預言者だな、あそこらにいくと、もうずいぶん福音に近い。福音そっくりなところも、もちろんある。聖書の読み方は、あなた方は、そういう角度からする。

「聖書入門書」

なんか、あんなもの読む必要はひとつもない。

アイネヤとタビタに、キリストの力が働いた、こういうペテロの現実です。治ったから良かった、というんじゃない。ペテロの、

「キリストといかに一つとなっているか」

という、それを見て、その祈りの中に自分を入れていかなければね。ここを読んでいたら、もう先に進めなくなって、ジーッともう祈るよりかしょうがない。だから、聖書を読むことが直ちに祈りとなる、ということです。

昨日、ここのところを私は読んでいてね、今日はもう話しにならないと思った。

「ペテロさん、参りました！」

と。では、この辺で。